
Fate/parallel night

真直一矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / p a r a l l e l n i g h t

【Nコード】

N 3 0 5 2 0

【作者名】

真直一矢

【あらすじ】

並行世界へと知らぬ間に渡ってしまった衛宮士郎。そこは魔術と科学が共存する世界だった。衛宮士郎は、知らない世界で、よく知る者達と共に闘いへとおもむく。

001：再会（前書き）

はじめまして、真直まっすぐいぢや一矢と言います。初投稿です。これは、昔作ったものを引つ張り出してきた作品であり、一話以外は設定止まりのまま放置されていたものなので、一話以降はこれからです。文章力は著しく低下していると思いますがよろしく願います。

001：再会

熱い

燃えるような熱さが俺を包んでいる。

息苦しさや熱さが混ざり合い、喉を焼き、全身を焼き、全身に痛みが走りぬける。これは、ある過去を俺から、無理やり引きずり出す。

——聖杯戦争——。

七人の魔術師と七人のサーヴァント。聖杯を巡る七組による殺し合い。それは地獄を再現させたような戦場を駆け抜ける戦いの日々だった。それと同時に思い出すのは白銀の甲冑を身にまとう、かつてアーサー王と呼ばれていた少女のこと。

俺が愛した女性のことを。セイバーのことを・・・。

しかし、彼女は帰ってしまった。決して手の届かない所へ。

聖杯戦争が終わって3年。それでもまだ昨日のように思い出せる。今ではマシになったが、聖杯戦争が終わって1年ほどは夢で見ない日はなかった。しかたがない結末、俺が正義の味方であるならば避けえぬ聖杯の破壊。俺はあれが間違いでないと信じているが、やはりセイバーがいなくなったというショックは確実に衛宮士郎の心に傷を残した。

一瞬、浮遊感を覚えた。しかし、それは本当に一瞬で背中に強い衝撃が走る。衝撃で息ができなくなり、数秒間苦しみで意識を失いかけたが、それをどうにか止めた。

それでも意識が朦朧となり、体を起こそうとするが力が入らず、

地面に倒れたまま動けずにいた。

体が熱い。

まるで業火に焼かれているような熱さが背中から這い上がってくる。

まだはつきりしない頭でなんとか今の自分の状況を分析しようとするが、まるで頭が働かず、ただぼーっと遠くだけを見ていた。

ここは町の中だろうか、俺を挟むように10階建てほどの高層ビルが立ち並んでいる。しかし、ビルはまるで人が使っているようには見えなかった。廃墟と呼ぶほどでもないがビルの所々が欠け崩れている。それは全てのビルに言えることで崩れたビルの残骸が道に散らばり、下にあった車が数台、残骸に押しつぶされていた。

その先は、逆光で見えにくい。ちょうど太陽がビルの間を照らしていた。眩しさを覚えても、体が動かず顔を反らすことも、手を翳すこともできないでいた。

その時、光に影がさした。それはシルエット状で見え、一瞬だが伸びた影が光を遮った。

「セイ・・・バー」

見えたのは、輝く金髪の髪。見えたのはそれだけだ、だが俺は走っていた。まだ痛みが残る体に鞭を打ち、光の方向へと走る。

セイバー。

彼女がいた。それはただ、朦朧とした頭が見せた幻覚かも知れないが、今の俺はそんなことを考えてはいなかった。ただセイバーの影を追って、走り続けた。

光が差し込む入口。そこは十字路の道路になっていた。ただそこも、廃墟と似たような状況になっていた。いや、ここはさつきよりも酷い。すでに廃墟と言っている状況だ。

高層ビルは崩れ、すでに天井や側面が削り取られたように無くなっている、中が吹きさらしの状態になっている。道路は罅が走り、道路に立っていたのだろう、信号機が折れ地面に倒れていた。

「なんだよ、これ・・・?!」

まるで世界の終焉だ。なにがどうなっているのか分からない。ここは新都なのか？それとも冬木市ですらないのか。

冷静になれ。

何故俺はここにいるのか。

どうやってここに来たのか。

集中することで記憶が鮮明になっていく。思い出すことに没頭し、だからこそ気付かなかった。

視界の端に影がさした。

それは上から落ちてきたにもかかわらず、ほとんど衝撃などなかったように軽く着地するといきならチツと舌打ちをした。

「クソッ、まさかこんな所でアルトリアと出会っちゃまうとわな」

不機嫌そうに悪態をついた。青い髪にアロハシャツ。そいつはアイルランドの光の神子であり、かつて初めて出会ったサーヴァントであり俺を一度殺した男――

「ラン、サー・・・!」

「ア、誰だ坊主？」

言ったと同時にポケットに入れていた掌ほどの銀色の筒を取り出すと、一度地面に向かって振った。すると筒の両端にある尖った先端が伸び開き、一メートル以上もある槍が姿を現した。

そして、それを無造作に振った。鞭のようにしなつた槍が俺の身体を捕えた。なんとか反応し両腕で庇うが、予想以上に強い衝撃が抵抗も許さず、体を貫き後方へと飛ばされる。硬く冷たいコンクリートビルの壁に背中を強く打ちつけ息が止まる。地面に座るようにしばらく動けなくなる。

細い影が差す。見上げればすでにランサーは距離を詰めていた。「誰だから知らねえが、坊主。俺のコードネームを知ってるってことは敵つてことで間違いないんだな」

槍を回し、槍を俺の心臓へと一直線に向ける。
既視感。

俺はあの日を思い返していた。学校の廊下。もう空が暗い遅い時間だった。後一刺しで俺を殺せる距離。ただ槍を突き出すだけで俺を殺せる距離だ。

あの時もこんな状況で、その時の俺は一度殺された。殺されていたはずだった。俺は救われたんだ、遠坂のおかげで。

あの時のランサーも俺をためらいなく殺し、おそらく目の前のランサーも俺をためらいなく殺すだろう。違いを上げれば、あの時のように助けてくれる遠坂はいない。

違う！

今は違う。俺はあの時の無力な俺じゃない。無力だった衛宮士郎はもういない！この三年間、俺はなにもしてなかったわけじゃない！！

——投影開始——。

魔術回路に魔力を流す。何度も繰り返した工程を終え、何度も作りだした武器を作りだす。干将莫耶、アーチャーが使っていた剣を。

たった一秒にも満たないうちに、士郎の手には、黒と白の夫婦剣が握られていた。

ランサーが槍を突き出す。俺は右手に持った黒剣・干将を、体を使い振り上げ槍を上へと逸らした。同時に、横へと跳び込むようにしてランサーとの距離を空けた。

すぐにランサーを視界へと入れる。干将莫耶を胸の前で構える。だがランサーは、すぐに止めを刺すために間合いを詰めずその場で立ちすくんでいる。その顔は驚いたように目を見開いていた。

「おい坊主、テメエ……。そいつは何の冗談だ？ テメエが持つてその剣、干将莫耶じゃねーか」

「?! なんて知ってるんだ？」

ランサーは俺の言葉を聞かず、頭を掻き毟る。分からないことがありすぎてイラついてるようだ。

「テメエ、まさかアーチャーじゃねえだろうな？」

予想もしていなかった名前に混乱する。アーチャー、俺の写し身。かつて正義の味方を目指し、救った者に殺された英雄。

「まあいい、テメエが誰だろうと関係ない。殺せばそれまで。それに俺は」

槍の先を俺へと向ける。憎しみを込めた殺気が先に突き刺さる。

「テメエが気に喰わねえ！」

地面を蹴り、疾走する。

槍を突き出し俺の心臓を真っ先に狙ってくる。俺は体制を低くし、干将で逸らす。同時に、白剣・莫耶で横に振るが簡単にバックステップでかわされた。

「ちったあ出来るじゃねえか！」

槍を回し、距離を詰めてくる。遠心力を利用し上段から振り下ろしてくる。それを真っ向から受けずに下へと流し、そのまま攻撃へ

と移るが、ランサーは槍を縦に回し、もう一方の先端で俺の腹を打った。

防御ができず、後方へと飛ばされる。背中から落ち、道路に仰向けに倒れるもすぐに起き上がろうとするが、すでに詰めていたランサーに足で踏みつけられ押さえられた。

「これで詰めだ」

槍を向けて、最後を告げる。

殺される。そう確信するが、なんとか足掻こうとするが、踏みつけている足で起き上がることができない。

「出来るだけ痛くないよう殺してやる。迷わず逝けや」

勝利を確信し、余裕のある声の上から降り注いだ。

似たような言葉を聞いたことがある。あれは初めてサーヴァントどうしの戦いを見た夜。俺はランサーに殺された。その時に聞いた言葉だ。そして、その日に俺はもう一度ランサーに命を狙われた。その時は、その時助けてくれたのは……。

ランサーは槍を縦に持ちかえ、先端を心臓へと向ける。そして、それを突き出そうとした瞬間、ランサーは後方へと跳んでいた。

なぜ、俺を殺さなかったのか。その答えはすぐにわかった。

ランサーとは違う影が差した。逆光で、シルエットで見える姿。

それでも俺にはすぐに分かった。

輝くような流れる金髪。黒いスーツで身を包み、赤いネクタイ、黒い革の手袋をしている。そこには日本刀を構えたセイバーの姿があった。

001：再会（後書き）

次話できるだけレベルを落とさず、むしろ上げるようがんばります。

002：戦闘（前書き）

無事2話投稿です。

といってもそれほど長文ではないですが・・・。
次はもうちょっと長くかきたいなあ
と思っている今日のこころ。

002：戦闘

切っ先をランサーへと向け、殺気を放つ。

油断なく構えたその姿にランサーは、待っていましたというように嬉しげに口元を釣り上げ獵犬のような獰猛な目でセイバーを見据える。

「ようアルトリア早かったじゃねえか。もう少しでその坊主を殺れたのによ」

「ランサー！貴方は何を考えているのですか、民間人を殺そうとするなど・・・、貴方はそんな人ではなかったはずだ。あの場所は貴方の誇りすら歪ませてしまったのか！」

ランサーの言葉に怒りを含まし声を上げる。

怒りのせいか、一瞬セイバーは無意識に魔力を放出し周囲を突風が走り周りの石を弾き飛ばしていく。

「民間人？謀るなよアルトリア。そいつは名乗ってもいねえのに俺のコードネームを言い当てやがった。しかもそいつは、隠し持ってた武器を抜いたんだ。ならそいつは等しく俺の敵だ。それに、ここは既に戦場だ。どうせお前んとこ新人だろ」

その言葉に驚きを隠せず、敵を前だというのにセイバーは振り向き俺の顔を凝視する。その目は探るような視線だった。

「貴方は・・・、アーチャーに似ている？しかし髪も背格好も違う・

・・・」

ぶつぶつと何事かを小さく呟いて、すぐに視線をランサーへと戻した。

「いえ、詮索は後にしましょう。まずはランサー、貴方を倒すのが優先です」

「アア、イイゼ！お前と殺り合うのはいつぶりだ、久々に楽しい死

合といこうぜ！」

歡喜と殺気に満ちた声が広がり、消え終わらないうちに両者は走り出していた。

五メートル程あつた距離を一瞬で詰める。丁度半分よりも俺に近い場所で両者は鏑迫り合いをしていた。つまりそれは、速さにおいてランサーの方に分があるということを示していた。

「ハアアッ！」

「オラアッ！」

両者共相手を押そうと力を入れるが、それが不毛と感じたのか、両者が強く弾き合い一度後方へと飛ぶ。

間髪入れずに両者は地面へと足を着くと、両者はまた磁石のように相手へと飛び込んでいく。が、次に早かったのはセイバーだった。

魔力を放出しブーストとして使い、一瞬で自身を最高速へと持つていく。ランサーが体制を立て直し一步目を踏む頃には、セイバーは上段から刀を振り下ろしていた。

しかし、ランサーはそれに慌てることもなく自然で無駄のない動作で身体を反転させ、刀を槍の胴で刀を弾き後方へと流す。そこで終わらず勢いを生かしたまま身体を回し、棒を叩きつけるように背中から強襲をかける。セイバーはその行動が見えているかのように瞬時に身体を反転させ、自身の身体に近い所で槍を受け勢いを受け入れるかのように自ら後方へと飛んだ。

「凄い・・・」

瞬きを許さない苛烈な攻防に、どこか懐かしさを覚える。聖杯戦争時、俺はこんな戦いをずっと見てきたんだ。

しかし今の攻防を見ても昔の戦いを思い出せるが、あれほどの常軌を逸した凄さというものが伝わってこない。どこか人間味があるというか、確かに自分以上の武の持ち主だということは解るが常軌を逸したという印象は受けない。

それはつまり、彼女達は生きているということ。

英霊、守護者などではなく。

生きている。この事実は衛宮士郎にとって、涙が流れるほど嬉しいことだった。

しかし、この戦場に士郎の感傷など関係ない。今この場でセイバーが死ぬという可能性も確かにある。

なら・・・それなら今度こそセイバーを守りたい。

「うぐつ、お、おおおおお！」

身体に走る痛みを無視し、肢体に力を込めていく。歯を噛締め、徐々にだが上体を起こしていく。

しかしそうこうしている内にも二人の戦闘は続いていく。両者とも身体に切り傷があり、一進一退の攻防が見てとれる。

今の俺が行ってもセイバーの邪魔になるだけだ。逆にセイバーに致命的な隙を生んでしまうかもしれない。

この状況で俺が、衛宮士郎が出来る最善の戦い方。

ランサーに少しでも隙を作れば・・・。

「・・・あれしかないな」

投影開始。

魔術回路に魔力を通し、ある物を作り出す。

昔から得意だった事。なんの才能もない自分に唯一人より上手く

できた技。

光が収縮し、左手に握られていたのは黒塗りの洋弓が、右手には一本の剣が握られていた。

剣と弓を杖代わりに、なんとか二本足で立ち上がる。身体には間断無く痛みが走っている。

歯を喰いしばり剣を弓へとたがえ、ランサーへと切先を向ける。

ランサーはセイバーとの戦いに集中してるようだが、俺の動きに気づいているようだ。時々こちらへと鋭い視線を送ってくる。しかしそれでも放置するのは、放たれたとしても避ける自信があるのか、セイバーの相手で手一杯なのか。おそらくどちらもだろう。俺へと注意を向ければ、その隙を絶対セイバーは見逃さない。

だからランサーが俺を襲うことはない。

それはセイバーへと存在への絶対の信頼。

俺は放つタイミングを逃さないために、集中力を高めていった。

剣と槍が交差し、火花を散らせる。四方八方へと銀線が煌めき、二人は間断なく撃ち合う。普通なら息継ぎが精一杯の状況で二人は言葉を交わし合っていた。

「チツ、あの坊主何から何まであの野郎と似てやがる」

「ええ。あの剣を矢として使う戦い方。立ち姿、そしてあの鷹を思わせる目……。しかし彼ではないでしょう。彼はもうそちらの魔術師です。それは貴方が一番解っていることだと思いますがランサー？」

「知らねえなあんな野郎のことなんぞ。それに剣はお前を向いてるかもしれねえぜ?!」

言葉尻を強く強烈な槍を振るが、セイバーは難なく捌く。それを

切っ掛けに、仕切りのおすようにランサーは一端距離を置く。

「貴方ほどの人が気づいていないわけがないでしょう。あの目は常に貴方へと向かっている。私を狙っているわけではないでしょう」

「アア、面白くねえ。折角お前との殺し合いだったのに、あの餓鬼横やり入れようとしやがって。むかつくあまり最上級の苦痛を味あわせて殺してやりたいぜ」

「そんなこと私が許すとても？」

殺気を込めランサーへと刀を横に向けるように構える。

「んなこたあ分かってるよ。だからこうやってくだぐだやってんじやねえか。ああ、やめだやめだ！こんな死合ちつとも楽しくねえ。

悪いが俺は帰るぜ」

そう言つて踵を返し、背中をこちらへと晒す。戦場でそれがどれほどの愚行か。

「逃がすとも思つか」

言うが、しかしそれに私は飛び込まない、いや飛び込めないでいた。

その姿でも一部の隙もない。飛び込めば、動けばそれはこちらの隙になる。

私は大丈夫だが、彼が危ない。今もランサーへと注意を向けている。良い集中力と持続時間だ。彼ならば最高のスナイパーになれるだろう。だがこの状況において、弓兵は槍兵には勝てない。私が飛び込んだ瞬間、ランサー真っ先に彼を狙うだろう。

頬に一筋の汗が流れる。

自分が緊張しているのが分かる。

数秒の時間。時が止まったように動かない空間で最初に動いたのは、帰ると宣言したランサーだった。

「やっぱ来ねえか。まっだろうな。お前が動けばあの坊主が死ぬ。

折角心おきなく戦える場所を作れると思ったがな。なあつ坊主聞いてるか！本当にテメエは何から何までいけ好かねえ野郎だ！」

言葉途中で私から視線を外し、彼へと獰猛な視線と殺気を叩きつける。一般人なら、戦場を知る者でさえも気絶しかねない殺気に中てられながらも立っているのは、素直に関心するが、表情は苦痛に歪み、立っているのも苦しそうだ。あれでは剣を放つこともままならないだろう。

「へー、良い根性じゃねえか。しゃあねえ、アルトリア最後の勝負だ。お互い最高の一撃で終わらさねえか？」

私は彼へと視線を送る。彼の状態では早くこの戦いを終わらせ、休める場所へ運んだほうがいいか。この緊張状態の中ではもう長くはもたないだろう。

「いいでしょうランサー。私の全てをもってお相手しましょう」

セイバーがリミッターを外したように、全身から魔力を放出した。

002：戦闘（後書き）

お気に入りに入れてくださった方ありがとうございます。

2話はどうだったでしょうか。

自分としては前回と同じようなレベルで書けたと思っているのですが・
・・。

精進あるのみですね。頑張っていきます。

003：決着（前書き）

3話投稿です。

前回より少し多めといっても500文字程度
これからも少しずつ増やしていこう

003：決着

それは力の奔流だった。

セイバーはだらりと刀を地面へと向けている。全身から強力な魔力を放出し、風を纏い、雷が周囲を走っている。

ランサー濃密な殺気のような魔力を槍先へと込め、体制を低く突きの体制をとっている。

「坊主、テメエが開始の合図だ。好きなタイミングで俺達を中心に放ちな」

視線を向けずにランサーが俺へと指示をだす。

もうセイバーしか見えていないようだ。

それを迎え撃つセイバーもランサーしか見ていないだろう。

俺は一人手に汗を握りながらタイミングを見計らう。

この剣をランサーへと飛ばせば防がれるだろうが、僅かな隙を作る事が出来る。セイバーならその隙程度でランサーを切ることが出来るだろう。

しかしそんなことは出来なかった。これはお互い申し合わせ、納得した誇り高い騎士同士の決闘だ。この戦いに水を差すならば俺が真っ先に切られても文句は言えない。

距離は五メートル強といったところか、お互いの殺気がぶつかり合い今にも空間が歪みそうだ。

額に流れる大量の汗を拭うこともできず、この濃密な緊張感で、身体を這いずるような痛みは一時忘れることができた。しかし精神的にはもう限界に近い。早く放ってしまいたい——と、思うが中々

身体は動いてくれない。

騎士たちの準備はすでに出来ているようだ。

後は俺の一矢で一秒もかかることなく決着はつくだろう。

俺は軽く、しかし全身に行き渡らせるように息を吸い吐き出す。

二人の中心を確認し、剣先を中心へと向ける。

その行動が見えていないはずなのに、周りの空気がもう一段階重くなった。

俺はもう一度深呼吸し、右手を放した。

剣は高速で二人の中心を射抜いた。普通なら認識不可能。見えたとしてもすでに刺さっているというような速度だ。

なのに――、剣が中心を駆け抜けた時にはすでに二人の位置は逆になっていた。

矢よりもなお速い一秒以下の戦い。

矢が音速なら、二人は光速の戦いを見せつけた。

二人は、見えてもいないはずなのに、俺が矢を放す気配を察知し、待ちきれないといったように動き交差した。

合図であつた俺が放した瞬間、決着はついていたのだ。

ごくつ、と喉を鳴らす。

どちらが勝つたのか、二人はどちらも自らの得物を振り下ろした状態で背中合わせに動きを止めていた。

静寂があたりを包む。

先ほどまであつた痛いほどの緊張感は霧散し、ただ二人の勝敗を確認するために凝視する。

痛い程の喉の渴きと、全身の痛みを無視したただ二人を見るために集中する。

まるで時間が止まってしまったような空間を、その秒針を最初に動かしたのはランサーだった。

屈めていた姿勢をスツと正し、口元を釣り上げる。それは悔しそうで、どこか愉快そうな笑みだった。

「やっぱこんな携帯用じゃ荷が勝ちすぎたか。良い業物持つてんじやねえかアルトリア」

ランサーは持っていた槍を放り投げる。甲高い音と共に地面に落ち、槍は中心からぼつきり折れてしまった。――否、傷口を見ればそれは綺麗な切り口をはつきり刻んでいた。

交差時、セイバーは見事相手の槍を掻い潜り、槍を切るという結果で一騎打ちの戦いは終幕したのだ。

「いえ、これは本来の貴方の武器ではないでしょうランサー。このような結果では勝ったとはいえないし、貴方に傷一つ付けてはいないのだからこの勝負は引き分けといったところでしょう」

「ハッ！それはお前にも言えんだろうアルトリア。俺達騎士は、特に俺やお前なんかのは、強力過ぎて滅多に使えねえ。それに武器の良し悪しで決まっちゃまような腕じゃあまだまだだよ」

「確かに。すみません、これはあなたにとって侮辱でした。謝罪しましょう」

セイバーは佇まいを正し、軽く頭を下げる。

ランサーは律義な奴だと、鼻を鳴らしそつぽを向いた。

「それでアルトリア、これからどうするよ？まだやるか、今なら俺は丸腰だ」

「・・・いえ、その彼もそろそろ限界のようだ。貴方が引いてくれるのならこちら引きましょう」

「そうかい。まあこっちも迎えが到着したようだ。ここいらでしめ

にしようか」

どうにか意識を保ちながら二人の会話を聞いていると、突如地響きが起きた。間断なく響く振動が身体を打ち痛みが増幅される。

振動に足を取られ、仰向け転倒する。もう立ち上がる力もでない。視線を上空へと彷徨わせ——何かが横切った。

それは一言で表すなら、ロボットだった。

バーサーカーをも超える、全長八メートル近い巨大な人型ロボット。闇のように深く沈んだ漆黒の装甲。その中でも異質な白い髑髏を象った頭部。肩部からは全体が隠れるようにローブのような外装が取り付けられている。

死神という名が一番に浮かぶ外見だ。

「なっ、なんだよあれ?!」

驚愕のあまり疑問の声を止められなかった。予想外を斜め上いく光景に絶句する。この時の俺はさぞかしまぬけな顔をしていただろう。

ロボットはこちらへと顔を向けると、肩部分から発砲音が聞こえると、何か細長いものが降ってくる。それは金属で出来たローブで、最後尾には輪っかが取り付けられている。

ランサーはすでにローブへと近寄り、輪っかに足をかけた。

「アルトリア、次は決着をつける。次は自らの本当の得物で殺り合おうぜ。あと坊主、死にたくなけりゃもう二度と出てくんじゃねえぞ」

それだけ言い残すと、ランサーを乗せたロボットはさっさと飛び出し彼方へと消えていった。

静寂が訪れる。しかしそれはすぐに終わりを告げた。

セイバーはロボットが去っていったのを確認すると、こちらへと身体を向ける。仰向けに倒れた俺の傍らへと近付いてきて、手を貸してくれるのかと思いきやセイバーはこちらへと刀を向けてきた。

「セ、イバー……」

「ッ！どうやらランサーが言っていたことは真実だったようだ。答えてもらおう、何故ランサーの、そして私のコードネームをしている？」

セイバーの空気が変わり、探るような目線を向けてくる。

説明を求められているようだが、俺にも何故こんなところにいたのか全く分かっていない。先ほど思い出せそうだったがランサーとの戦いですでに消え去っていた。

——あ、やばい。さすがに限界だ。

意識が沈みこみ、もう何も考えられない。抗うこともできず俺は眠りへと落ちていった。

最後に見たのはセイバーの心配そうな顔だった。

右耳に付けてあるインカムを押し、司令部へと通信を行う。
一秒とたたず、スピーカーの向こうから声が聞こえてきた。

「御苦労だった。そちらの状況説明をお願いします」

「すみません司令。ランサーを逃がしてしまいました」

「いや相手はかつて最高の騎士、三騎士と謳われた一人。君と同じ三騎士の一人だ。君とで一筋縄ではいかないだろう」

「いえこれは私の未熟ゆえです。次は必ずこの手で。——あとも

う一つ報告したいことがあります。民間人……いえおそらく民間人ではない青年を一人保護しました」

「むっ、それはどういう――、すまないが少し待ってくれ」
そこで一時通信が途切れた。

急に手持無沙汰な時間ができ、私は倒れている青年へと視線を向ける。さきほども思ったが、やはりどこかアーチャーに似ている。アーチャー、本名は衛宮士郎という。

彼との付き合いはそう長いわけではない。ほんの三年前だったか。彼の第一印象は一言で、お人よしだった。誰かのために行動し、仲間を思いやり、誰かのために戦う。時々自分を蔑ろにする傾向があったが、決して嫌いな人ではなかった。

それは、むしろ恋心だったかもしれない……。

青年の顔は彼を若返らせたような感じだ。

昔の写真でも見れば分かるかもしれない。

しかし彼は半年前、あの事件で彼を慕う者、知る者全てを落胆させた。

インカムからノイズが聞こえ、すぐに司令の声が聞こえてくる。
「待たせたな。すまないがその青年をこちらへと連れてきてくれるか」

「なっ、なにを言っているのですか司令！この者は我々のコードネームを知っていた。そのような身元の知れぬ者を司令部へと連れていくなど、危険です！」

「これは決定事項だセイバー。それにこれは私の判断ではない。あの方の所望だ」

なっ！と今度こそ絶句する。

あの方がこの争いに関与することはないし、我々になにかを望んだことがないのだ。

それが、初めての望みがこの身元不明の青年を連れてこいという

ものだったのだから驚かないはずがない。それは司令部のクルーも同じなのか息を呑むような音と、非難めいた声が聞こえる。

「これは命令だセイバー、すぐにその青年を連れて帰還するように」
その言葉を最後に、重い沈黙が下りる。すでに話は終わったという強い強制力を感じる。

「了解しました。速やかに帰還します」
通信を切り、青年を肩に抱え上げる。

見た目よりも鍛えているのか、ずっしりとした重さが肩にかかった。しかしセイバーにとって慣れている重さなのか、表情を変えず、司令部のある方角へと移動を開始した。

003：決着（後書き）

やっと出てきました、この物語の重要なものの一つ”ロボット”！
といってもほんの少しだけです・・・。

アーチャーの裏切りとは？！

そしてあの方とは？！

と、あおつてみたもののたいした謎はないかもしれません。

ということでしたでしょうか？

そして、新たにお気に入りにいられたくださった方ありがとうございます。
ます。

これからも頑張っていきます。

004：目覚めの一撃（前書き）

4話目投稿。

と、いつもと変わり映えのない言葉からはじまりです。
この前書きにも何か変化をつけたいな・・・
何か考えてみようと思います。

004：目覚めの一撃

はっ、と士郎は目を覚ました。

霞んだ視界に映るのは、白い天井と眩しい光源。
微かに薬品特有の匂いがする。

ここはどこだろうか？

ぼんやりとした頭で、天井を見続けているとブーンと駆動音と共に、誰かが入ってきた気配がした。

カツンカツンと軽い音をたて、近づいてくる。

「目が覚めたか。体調はどうだ？」

誰かが話しかけてきた。その声にどこか懐かしい気持ちが広がる。
視線だけを横へと向け相手を確認した。

「一成、ツア！」

驚きのあまり条件反射のように、突然上体を起こしたせいで痛みが走る。そのおかげでばやけていた思考がはつきりと覚醒するのが分かった。

突然名前を呼ばれた男は、驚いた表情を見せるが、その瞳にはどこか懐かしむような感情が窺えた。

「・・・確かに私の名前は一成、柳洞一成と言う。すまないが私は君とは初対面のはずだ。名前を聞かせてもらってもいいか？」

全身の痛みが徐々に引いていき、改めて一成の顔を見る。

一成——、いや確かに似ているが俺が知っている一成とは十近い年齢差がありそうだった。耳が隠れる程で切られた黒髪、黒縁のメガネを耳に掛けている。きつちりとしたダークブルーのスーツを

着込んだ、威厳のありそうな男性だった。

しかし、今確かに柳洞一成と名乗った。

やっぱりここは……。

うつすらとした確信が、はっきりとした色を帯びる。

「むっとうした、まだ痛いかな？ 報告では打身程度で骨に異常はないということだったか」

「いえ、すみません大丈夫です。それよりここは……、あつすみません、俺の名前は衛宮士郎と言います」

身体はまだ痛みがあるが耐えられないことはない。骨に異常はないらしいし、これなら立つて歩くぐらいはできそうだ。

自分の身体を確かめるように身体を動かす。一通り確認し終わり、一成の方へと向き直ると、そこには驚きに眼を見開く一成の顔があった。

「……あの……？」

「あつ、いやすまない。こちらにもいろいろと事情があつてね。まだ万全ではないだろうが君に会いたいという御方がいるのだ。今から付いてきてもらえるかな？ おそらくは君にとっても有益な情報が手に入るはずだ」

俺に会いたい？ ということだ……。俺の推測が正しいならこの世界で俺を知っている人はいないはずだ。

一瞬、昔一度だけ会ったことがあるはずのちやけ爺さんを思い出すが、すぐに頭を振り考えから追い出す。あの人と関わった記憶はあまり思い出したいくないモノの一つだ。

「分かりました。今からですか？」

「ツライだろうが、できるだけ早いほうがいいな。……私も含め他の者も事情を知りたがっているからな」

最後の方の言葉が小さく聞き取れず、もう一度聞こうとするが、

一成それを遮るように立ち上がりドアへと進んでいく。
俺は慌てて立ち上がり、一成の背中を追った。

廊下は壁と共に白を基調とした作りで、床の中心に青いラインが伸びていた。

頭上からは電気が光を降ろし、綺麗にみがかれた廊下が光を反射している。

遠くを見れば窓ガラスがあり、オレンジ色の陽光が注がれている。すでに日が沈みかけている夕時のようだ。

壁にはいくつもの扉が設置されている。俺が寝ていた部屋同様にいくつもの部屋があるようだ。

「ここは宿舎でな、百人近い人がここで生活をしている」

一成がこの建物の説明をしてくれる。なぜそんな人数が一つところで暮らしているのか、ここは一体なんの施設なのか。そんな質問が口に出そうになるが、おそらくは今から行く場所で説明があるのだろうと思いとどまる。焦っても仕方がないだろう。俺もできるだけ整理をしておこう。

まずは何故自分がここににいるのかだ。

ランサーと戦う前に考えた疑問をもう一度考えようと、思考の海へと潜ろうと集中する。

しかしその思考も、本日二度目の妨害を受けることになった。

おそらく目的の場所へと続く廊下の、右側にある一室の扉。そこから一人の女性がボサボサになった腰まである黒髪右手をつっこみ、軽く持ち上げながら出てきた。かわいらしい猫のイラストが入ったパジャマ姿で、おそらく年齢は一成と同じ二十代半ばといったところか、寝起きで不機嫌そうな顔をしている。

・・・なんとというかよく見たことがある寝起き顔だった。

女性はその声で初めて気付いたのか、すわった目でこちらを一瞥し、目を見開き固まつた。まるで幽霊でも見たかのような驚きぶりだ。

視線は俺の方へと注がれている。俺はどうしていいか分からず動けずにいると、女性は顔を俯かせ一歩一歩重い足取りで近づいてきた。というか地面を踏みつけるようにどしどしとやってくる。俯いた表情は見ることはできない。

無言で俺へと近づいてくる。

何故か俺の少し前にいた一成は、彼女を通すように横へとずれた。

—— ああ、これは・・・と思う。別に未来視なんてとんでもス
キルはないが、この後の事態が分かってしまった。

俺の前へとたどりついた女性は、急に震えだす。俺は声も出せず、成り行きを見守ることしかできないでいる。

「ア・・・アア、アンタ」

女性は、右拳を力一杯握りしめる。それを肩のあたりまで振り上げ、絶叫と共に寝起きとは思えない見事な体重移動でもって、俺の顔面へ拳と突きだした。

「シロウ……！」

「なんでさ――――！！」

拳は綺麗に俺の顔面を捉え、俺は強制的に身体に捻りを加えながら吹っ飛んでいった。

「アンタ！よくものこのこと帰ってきたものね！」

そう捲し立て、凄い剣幕で俺へと一步踏み出した。

「待て遠坂、おちつけ。よく見てみる」

一成が横からなだめるように声をかける。・・・なだめるなら殴られる前にしてほしかった。

「なによ一成！アンタもこいつに一発二発・・・って、ちよつと士郎なんか若返ってない？」

「そうだ遠坂。彼は我々の知っている衛宮士郎ではない」

「そんなわけないでしょ！こんな御人好しそうな馬鹿な顔、二人とないわよ。若返ってるのなんてなにか魔術でも使っているに違いないわ！」

「それは否定しない。それを確認するために、我々はあの方の所へと行くところだったのだ」

なっ！と、女性は驚きの声を上げる。一瞬後すぐに一成に罵声を浴びせた。

「何言ってるのよ一成、コイツを会わせる？！アンタあの事件を忘れたわけじゃないでしょ、危険よ！」

「いや、これはあの方の意思だ。私はただ彼を連れてくるよう頼まれただけだ。それにそこで我々にも彼について説明してくれるらしい」

「・・・そう・・・分かったわ。でも私も行くわよ、コイツが変なことしないようにね。ちよつと待ってて」

そう言って女性は先ほど出てきた部屋へと引き返した。

どうやら話は纏まったらしい。というか、俺はなんで殴られたんだ？

疑問に思い、起き上がりながら一成へと視線を向ける。しかし、一成は視線に気づいたがやれやれといったように肩を動かし何も話してはくれなかった。

事件という言葉もあったし、何か聞いてはいけないような気がし

て、右手で顔をおそるおそる触れながら無言で彼女を待った。

004：目覚めの一撃（後書き）

どうだったでしょうか？

今回切りのいいところで終わらそうといつもより短くなってしまいました。

次回は、この世界についていろいろ説明を入れていきたいと思えます。

005:サーヴァントシステム(前書き)

5話です。

なんとなく文が固い、淡々としている。

力が弱い。

もっと上手になりたい——い!!

と、叫んでいる作者です。

005：サーヴァントシステム

「遠坂凜よ。まあ、あなたはとづくに知っているでしょうけどね」

私服に着替えを終え、自室から出てきての最初の言葉は、語調を強めた皮肉交じりの自己紹介だった。

——遠坂凜。それはよく知っている名前だった。忘れる事なんてできない。聖杯戦争時、時には戦い、時には共に協力し戦場を駆け抜けた戦友の名前だ。何度も何度も助けられ、恩だけが積もっているのが現状で、いつか返したいと思っているがいまだその機会がやってこない。ちなみに魔術の師匠でもある。・・・遠坂、今にやってるかな？

いろいろと考え事をしていながらも、一成を追いかけるようにどんどんと先へと進んでいく。さすがに百人も生活しているだけあって、このビルは一階分だけでもかなりの広さがあった。

身体の方は大丈夫だが精神的な疲労が激しい。その大部分の原因をしめているのは、合流してからずっと俺の後ろで睨みながらついてくる遠坂凜にあるだろう。

何かしたらタダじゃおかない、という明確な感情を持つ視線を背中にチクチクと感じる。こんな得体の知らない人物がいたら、疑いの目を向けるのもしかたがないとは思うが何とかしてほしかった。

はあ、溜息を一つ吐く。一体この世界の衛宮士郎は何をやったのだろうか。この恨まれようは一寸やそつとの事じゃない。しかしこの事を聞ける雰囲気でもなかった。

誰も一言も喋らないまま、どんどん廊下を進んでいき、辿り着いたのは何の変哲もないエレベーター扉の前だった。どうやら下に降りるようだ。

一成は指を伸ばし下矢印の描いてあるボタンを押すと、丁度来ていたのかすぐに鐘を鳴らしたような甲高い音を出し左右へと開いた。

内装はシンプルで、あまり俺がいた世界と変わりがない。さつきまで見ていたビルの中も何の違いもない。あの廃墟以外は……。開いたと同時に一成から順に入っていく。中は三人の人が入ってもまだ余裕のある広さだ。

一成はすぐに扉横にあるボタンに手をかけようとしたが、それを一端止めこちらへと振り返った。

「衛宮士郎。これから会ってもらう方は我々にとっても重要な人物でな、我々も慎重にならざるおえない。少なくとも君が何者かが分かるまでな。君が何か不審な行動をとれば取り押さえ、場合によっては怪我を負わせることも厭わない。内心私も君を連れていくことは反対なのだが、あの方の所望でな……。出来る限りは叶えてあげたいのだ」

一成は一瞬悲しそうな顔をするが、すぐに表情を元に戻す。一成と遠坂の態度を見ると、それほどまでにあの方と呼ばれる人は、ここにいる人達にとって大切なんだろう。

俺は重く一回頷いた。

「その通りよ」

頷くと同時に後ろから声をかけられ、振り返る前には眉間に何かを突き付けられた。銃、と一瞬頭を過るが横目で見れば突き付けているのは、遠坂の細い人差し指だった。なーんだ、なんてことは思えない。

——ガンド。指さすだけで相手の症状を悪化させるという北欧の呪いの魔術、遠坂が得意とした魔術だ。この世界の魔術が俺の世界と同じかどうかは分からないが、今の遠坂の殺気まじりの行動を

見ると何も無いと思えない。

「何かすれば問答無用で打つわ、たとえあなたを殺しまうとしてもね。お馬鹿な衛宮君でも分かるでしょ？余計なことはいらないほうが身のためよ」

そう強く警告し指を放した。

額に汗が流れる。別ににもする気はないが、これだけされると背筋に寒いものを感じる。

「わ、分かってるよ遠坂。俺はなにもしない」

「ふん、当然よ。それとアンタ私より年下でしょ、さん付けで呼びなさい」

最後に言うと、遠坂は腕を組み壁へと背中を預け目を閉じた。

あつ、そっか。前の世界じゃ同じ年だったけど、この世界では年上なんだ。これからは気をつけようと心に決める。

「では行くでしょう。あまり待たせるのも申し訳ないのでな」

一成は先ほど同じようにボタンの方へと指を持っていく。しかし、番号の描かれたボタンではなくその上にあつた小さなモニターへと持っていく。そこに指を押し付けると、ピツという電子音と共に、ボタン群の下に先ほどまでなかったボタンが現れた。

指紋認証と隠しボタン。

何重にも敷かれたセキュリティ。おそらくはここから先もいくつものセキュリティが敷かれているだろう。それだけ一成や遠坂、ここに多くの人達にとってあの方という人は大事な人なんだろう。

静寂の空間。その中で重い駆動音が響いている。

扉上の現在の階を示す表示灯はB1を過ぎさり、すでに光を消している。

背後のガラス窓は、さきほどまで入ってきたオレンジ色の光は消

え去り、今はただ闇だけを映し出している。唯一の光は頭上の電灯だけだった。

エレベーターが動き出してからすでに二分が経過した。それでもまだ着く気配がない。どこまで降りるんだろうか？考えてみればこの世界について何も知らない自分が、このまま流されるように行動して大丈夫なのだろうか？いいような不安が遅まきに背筋をなでる。

その時、背後から眩しい光がさした。それは一瞬のことだったが、電灯よりも強い光に視界がはつきりしなくなる。徐徐にはつきりしてきて、ガラス窓から外を見た。

「な、なんだあれ！！」

目測では測れないほどの巨大なスペースを誇る部屋。そこには何種類もの太さの管がそこかしに絡まりながら伸び、それはあるモノへと続いていた。

その部屋で一番目を引くモノ、形は違うがああ廃墟で見たモノ。それは、巨大な人型ロボットだった。合計四体のロボットが立ち並んでいる。

思わずガラス窓へと顔を押し付けるように駆け寄る。赤、紫、青のロボット。そして何故か三体から引き離されるように置かれた赤と黒を基調とした機体があった。その周りを多くの人が走り回っている。

「あれは我々が所有する、サーヴァントシステムを搭載した人型戦闘兵器。俗にサーヴァントシリーズと呼ばれているモノだ」

扉前にいた一成がいつのまにか横にいて、ロボットについての説明をしてくれる。

「サーヴァントシステム？」

「十年以上前に世界で高名なゼルレツチ氏が提唱した理論により作られた。機械を使い魔力を増幅することができる。だからこそ、人があのような巨大なモノを動かすことができる。これを用いれば魔力が少ない者も、その者の使える以上の魔術を扱うことができるというものだ。これ以上詳しいことは科学者ではない私には分からないが、この技術は一般のモノにも使われている」

「ちよつと待ってくれ。魔術が一般的に知られているのか？」

その言葉に、一成は訝しむような視線を向けてくるが、気を取り直して説明を続けてくれる。

「世界が慢性的なエネルギー不足に悩んでいたのはもう二十年も前のことだ。科学者はその問題を解決するために目をつけたのは魔術師の言う魔力だった。マナとオドをエネルギーとして扱える機械の開発に成功し、今では全国に普及している。常識だろう？」

と、疑問で聞いてくるが、俺にはこの世界の常識は分からない。まさか魔術が一般的になっているなんて、前の世界では考えられないことだ。

「もともと工業用、救助用として使われるはずだった技術を流用し、今では戦闘用として使われている」

「・・・ということは、この施設って」

廃墟での事を考えれば予想できたことだった。そこまで頭が回らなかったということもある。

俺の戸惑った声に、はつきりとした言葉で返してくれたのは遠坂凜だった。

「そうよ。今私達は戦争をしているの。あるモノを懸けた戦争をね」その声は固く、怒りに震えているように聞こえた。

「遠坂落ち着け。悪いがこれ以上のことは、まだ話せない。まあもう少して分かるところがね」

これ以上の話はないという明確な意思を込めて話しをしめる。同

時に先ほどの部屋を通り過ぎてすぐにチーンと甲高い音と共に、扉が開かれた。

ようやく目的地に着いたようだ。

順にエレベーターから降りていく。

そこで見たものは、一言で表すとそこは白い世界だった。

005:サーヴァントシステム(後書き)

どうだったでしょうか？

なんというかツツコミができそうな設定と、

キチンとできなてないような説明の話でした。

自分の文才ではこれが限界なんで、必要な説明は今後話の中でやっていきたいと思います。

006：罪（前書き）

6話です。

今回並行世界という言葉を使うのに調べたんですが、同時に異世界という言葉もありましたがどうやら違う概念のようです。

・・・この世界はどちらなんだろう？

今回は引つ張りに引つ張った衛宮士郎の罪が明かされています。たのしんでくれたらなによりです。

006：罪

上下左右あらゆる方向が白に統一されている。

そのせいで壁があるのかも、ここがどの程度の広さがあるのかも分からない。

その空間には、まるで神様の神殿にでもありそうな丸い石柱が、まるで濃淡で描かれた絵画のように浮き出ている。

そして一際目をひくのは、唯一のこの白い世界で色彩がある西洋の城が建っていた。アインツベルン城よりも一回り以上も小さいが、教会のような神聖な雰囲気を感じられる。しかしどことなく廃れてしまっていて、ところどころに色がくすんだり、崩れている個所が見受けられた。

城の前には庭園があり、ファンタジー小説にでも出てきそうな幻想的な景観だった。

二人は俺を置いてどんどん城へと進んでいく。俺はその背中をゆつくりと追いかけた。

——一歩目、二歩目、三歩目。

おそろおそろ、地面に足を置いていく。ここまで何もない白、目に見える位置に壁もない地面というのは、ここまで恐怖心を掻き立てるのかと土郎は初めて知った。

本当にこの先に道があるのか？という疑念が足取りを慎重にさせる。

しかし、前を着実に歩いていく二人はすでに慣れてしまっているのか、確りとした足取りで進んでいっている。

——四歩目、五歩目、六歩目。

徐徐に慣れて、確りとした足取りへと変わっていく。そして、次

の一步を踏み出した時、気配を感じた。

殺気！と感じた時には、すでにプログラムのように刻まれた言葉と、条件反射のようにすでに手に収まっていた干将莫耶を頭上で交差させた。

そのコンマ一秒後、腕に衝撃が走った。

目の前には黒を基調としたメイド服を着て、その身の丈以上のハルバートと呼ばれる斧を振り下ろした女性の姿があった。

ガキーン！という甲高い音と共に、とつさのことでイメージに綻びがあつたのか、それとも余りにも強い衝撃のせいか、あっさりと干将莫耶は砕け散った。

「返せ、返せ！アイリスを返せ！！」

怒りに閉じ込めたような静かな怒声が響く。

怒涛の攻撃は終わらない。あまり感情の窺えない表情だが、その双眸だけは怒りに燃えている。女性の二倍以上もあるつかという斧を軽々と振り回し、鉄柱の先に取り付けられた刃が手加減なく迫ってくる。

それを新たに投影した干将莫耶で弾き、逸らしていく。砕かれれば何度も投影して猛攻をなんとか防いでいた。

「リーゼリットやめなさい！」

遠坂が停止の呼びかけをするが、彼女はそれを聞き入れない。ただただ目の前の男を排除しようとハルバートを振りまわす。

幾度もの重度の攻撃に手が痺れ、もう限界というところで、鋭く、鈴のように綺麗な声が聞こえた。

それは小さいながらも、空間を覆うように響いて聞こえた。

「やめなさいリーゼリット、お行儀が悪いわよ」

その声は城から響いてきていた。

城の三メートルある扉が開き、中から二人まだ少女呼べる年齢の子と、二十代前半ぐらいの女性が出てきた。

少女は白銀の髪に合わせたような純白のワンピース。女性は、先ほど襲ってきた女性と同じメイド服を着ている。

「それに言ったでしょ、その男性は別世界の衛宮士郎だって」
「・・・でも、イリヤ・・・」

悲しそうに提言を出そうとするメイドに、イリヤはやれやれというように一つ静かに息をはくと、優しく笑顔を向ける。

「でも私のために怒ってくれてる貴方の優しさは嬉しく思うわ。ありがとうリス」

その言葉に怒りは成りを潜め、嬉しそうに少女へと走り寄っていく。

後に残ったのは、虚しく武器を構える衛宮士郎だけだった。

「はじめまして、並行世界の衛宮士郎。私の名前はイリヤスフィール。そして、後ろに控えているのは私の世話役のセラとリーゼリットよ」

——イリヤ。その姿は一成や遠坂と同様、やはり俺の世界のイリヤスフィール・フォン・アインツベルンと同じ容姿をしていた。というか何から何まで瓜二つだ。

声や雪のように白い髪、上質な赤ワインのように紅く深い綺麗な目。しかし容姿に似合わず大人びた雰囲気を感じる。

「ちょっと待ってイリヤ。並行世界って、どこの小説よ。そんなことを信じるってどういうの？」

遠坂が異世界という言葉に提言する。

「リンは信じてないの？並行世界の存在を」

「並行世界って、つまりはパラレルワールド。いくつもの可能性、

IFの世界ってことでしょ？いくら魔術なんてものがあるからってそんなの信じられるわけじゃないじゃない」

どうやらこの世界には魔術があっても、並行世界、第二魔法『並行世界の運営』がないらしい。ならば並行世界と聞いたところで、到底信じられるものじゃないだろう。

「なら、その衛宮士郎と名乗る彼はどうやって説明するの？」

目を細めイリヤは遠坂に問いかける。どこかからかっているような、楽しんでいるように見える。

「そ、それは・・・」

「幼馴染である貴方達なら分かるでしょ？彼の姿が昔の衛宮士郎と瓜二つだということを」

言葉を詰まらせ、遠坂はこちらに視線を送る。どうやら判断しかねているようだ。

一瞬の沈黙。それをやぶるように声をかけた。

「イリヤ」

その瞬間、セラは一步踏み出し強く睨みつけてきた。

「貴方がお嬢様を呼び捨てにするなど許されません！」

セラが怒鳴りつけてくる。どうやら俺が呼び捨てにしたのが気に入らなかったようだ。しかし、イリヤが手をかざしセラを止めた。

「いいのよセラ」

「しかしお嬢様！いくら別人だと言っても衛宮士郎を名乗る者が気易くお嬢様を呼び捨てにするなど！」

なおも提言しようとするセラにイリヤは微笑んだ。セラは洪々ながらも引き下がる。

「私がいいと言ってるのよセラ。それで衛宮士郎、話の続きは？」

「・・・俺は確かに並行世界から来た。俺の世界には第二魔法、並

行世界の運営というものがあるから多分それでここへ来てしまったんだと思う。何故ここへ来てしまったのかはまだ思い出せないけど・
・・」

「ええ、それも理解している。聞いていた通りこの世界には並行世界を渡る技術はない。だけど私達ならそれも可能よ」

その言葉に希望の光が差す。

—— 帰れる。並行世界を渡るなど俺には到底無理なことだ。この世界にその技術がなければ帰れる望みなどなく、一生この世界で暮らすことも覚悟しなければならなかった。しかし目の前の少女は帰れると確かに言った。

俺はぐつと右拳を握り、喜びの声をあげようとしたが、何故か俺とイリヤ以外の顔が暗く沈んでいた。

「そう、貴方は帰れる。だけど今すぐとはいかないの。なぜなら私の半身であり姉であるアイリスフィールは、半年前、この世界の衛宮士郎によって奪われてしまったから」

その言葉に俺は驚愕に息をのむ。

これが、これこそが、一成や遠坂が衛宮士郎を嫌う理由。

—— この世界の衛宮士郎が犯した罪。

006：罪（後書き）

どうだったでしょうか？

今回なんというかいつものクオリティで書けなかったように思えます。

いつもより浅いというか・・・。

次話は、イリヤについて進めたい思います。

007: 聖杯（前書き）

7話です。

今回はイリヤについて。

といっても前回とかですでに分かってしまってるという人もいるでしょうが・・・

007：聖杯

僅かな沈黙が流れた。

衛宮士郎がイリヤの姉であるアイリスフィールを攫った。

その事実には俺は何も言えないでいた。

「私達は二つで一つ。どちらが欠けても完全な機能を使うことはできない。まして、貴方を並行世界へと渡らせる力となればアイリスフィールがいてくれなければ到底できることではないの」

その言い回しにどこか違和感を感じる。

「ちよつと待ってくれ。なんで俺が、いやこの世界の衛宮士郎が君の姉さんを攫わなきゃいけないんだ？それにさっきから君は、二つとか機能とか自分をモノみたいに言って、どういうことなんだよ？」

何かがおかしい。

いや、この国は戦争しているんだ。争い、殺し合い、奪い合う。

戦争には何か理由が必要だ。

俺は混乱しながらも、目の前に無表情で佇むイリヤへと目を向ける。その瞬間、頭の中で記憶がフラッシュバックする。

——聖杯。

第五次聖杯戦争で負わされたイリヤの役目。

聖杯の器という役目を負わされた少女のことを。

いや待て、ここは並行世界だ。前の世界とは違う世界だ。それは違う、それだけは違うはずだ。目の前の少女がそんなモノであるはずがない。

そんな願望にも似た想いが脳を駆け巡り、記憶を押し戻そうとする。

だって、それはあまにも——。
懇願するように、彼女へと視線を合わせる。

「モノよ。私達は人間ではない。使う者に絶大なる力と英知を授ける。そう、私達は『聖杯』と呼ばれるただの装置よ」

その言葉に感情というものが感じられなかった。ただ淡々と機械のように自らの機能説明をしたような冷たさがあった。

「正確に言えば、私の役目は聖杯の器。そして、アイリスフィールは器へと注がれる力の源。二つで一つとはそういう意味。この身体も作りモノ。自らの内に眠る聖杯を守るために私達は身体と人格を与えられた」

その告白に愕然とする。

言葉が出てこなかった。周りを見ればイリヤ以外は暗く沈んだ顔で、何か悔しさを耐えるように拳を握りしめている。

リーゼリットは、イリヤを放さないように抱きしめている。

この世界は今戦争をしている。聖杯戦争と同様、この世界で奪い合うモノとは——。

——なんで、なんでこの世界も前の世界も、イリヤに耐えきれないモノを背負わせる。

悔しかった。そして、許せなかった。この世界の衛宮士郎が何故そんな行動に出たかは知らない。けどどんな理由があっても、誰かの大切な人を奪う権利なんて誰にもない。

衛宮士郎の心中で、アーチャーの時とも違った嫌悪感が支配していく。

「つまり——」

「つまり、イリヤの姉のアイリスフィールさんを助け出せばいいん

だな？」

イリヤの言葉を遮り、俺は決意を込めた言葉を発した。
イリヤは驚きの表情で返してくれる。

「ちよつと何いつてるのよアンタ！私達は戦争をやっているのよ、殺し合いよ。アンタみたいなシロウトが覚悟も無く言っていることじゃない！」

すかさず遠坂が反対の言葉を上げた。

当然の反対だろう。しかし、俺はシロウトではない。俺は短い間だったが、戦争というものを経験した。人知を超えた戦いを目のあたりにしてきたんだ。そして、俺自身もずっと研鑽を積んできた。だから俺は守りたい。

「覚悟ならある。戦争なら経験した。俺は守りたいんだ！」

俺の啖呵の言葉に押され、全員が沈黙する。

真っ先に口火を切ったのは、一成だった。

「いいだろう。衛宮士郎、君を部隊へと加えよう」

「一成、本気？！コイツ犬死になるのが関の山よ」

「彼は本気だ。先ほどのリーゼリットとの戦いを見れば分かる。戦いの世界で生きたことがあるのだろう。戦力に余分などないのでな。それに戦いでは確かに個人の武力は重要だが、それだけではないのは君が一番よく知ってると思うがね」

「ッ！・・・はあ、もうなんなのよ。衛宮士郎って人間は、どの世界に行ってもバカなの？もしかしてアンタも正義の味方になるってバカなこと言ってるんじゃないでしょうね？」

俺は内心その言葉に驚きながらも、苦笑しか返せなかった。

遠坂は、そんな俺を呆れながら見た後、息を一つつく。

「いいわ一成。でも私も条件がある」

「ふむ、その条件とは？」

「衛宮君に實力を示してもらうのよ。これは私だけじゃないわ他の皆もきつとそういうはずよ。足手まといならいらぬもの」

緊張が走る。それはつまり、遠坂と戦うということ。

でも、それは――。

「ま、待つてくれ。遠坂とは戦えない」

その瞬間、遠坂の目が一瞬にして鋭くなった。そこまで離れていたらと言わないが一瞬にして間合いを詰めると、怒りのこもった固く握った拳を迷いなく腹筋へときめてきた。その後は腹を抱え蹲るしかない。

「アンタ私が女だから戦えないとか言おうとしたでしょ。いい、良いこと教えてあげる。私は女だからとかそういうのが一番嫌いなものよ。遠坂とは戦えない？その言葉アイツからも聞いたわ。今回と同じようなことでよ。その時もアンタと同じように目に、いえ、もっと楽しくしてやったわ。そうなりたくないならこれから氣をつけることね。あ・と、アンタまた呼び捨てにしたでしょ――！」

顔を暗い笑みに換え、遠坂が警告してくる。

そして止めのように、丸めた背中へと踏みつけた。

答えを待たず、身を翻し一成へと相對する。

「そうゆうことよ一成。明日、訓練所でコイツと戦うわ。許可申請お願いね。後、観戦も歓迎だから告知もしておいてね」

「ああ、了解した」

どうやら俺の意見は無視で戦うことは決まってしまったようだ。遠坂と戦うのはまだ戸惑っているが、ここでやめればそもそも部隊に加えてくれないかもしれない危険がある。彼らにとって俺は部外者でしかないからだ。

話がまとまり、一成と遠坂が明日のことで話し合っていると、セラが一回手を打った。

「話は終わりましたか？ではそうそうに御引き取りを。お嬢様はこれから御就寝の時間ですので」

「あつ、もうそんな時間か。じゃあね、イリヤまた時間が空いたら来るわ。それと明日の戦い見に来てね」

遠坂はイリヤにそれだけ言うと、軽く手を上げてエレベーターの方へと歩いていく。一成も一度頭を下げそれに続いた。

できればもっとくわしく聞きたいことはある。この世界について、戦争について、聖杯について。

しかし、ここで駄々をこねてもしかたがない。俺は一度「ありがとう」と言うと、二人を追いかけてその場を走り去った。

エレベーターで地上へ出れば、すでに日は沈み、廃墟の方は闇の海に沈んでいた。

007：聖杯（後書き）

どうだったでしょうか？

ここでやっと一日目終了です。

次は遠坂凜との戦い。

他の登場人物も次々と出していきたいと思います。
また番外編とかもやってみたなあと思っています。

008：セイバー（前書き）

8話です。

少し間を空けてしまいました。

いろいろと忙しかったのと、番外編を練っていました。

本編にはほとんどでない、ドタバタコメディを入れていこうかなと思っっています。

008：セイバー

翌朝、けたたましい音が部屋中に響いた。

何事かと飛び起き、辺りを見回す。

予想もつかない騒音のおかげで、頭は真っ白でただ混乱し何度も周囲を確認のために、頭をいつたりきたりさせる。

どうやら音はドアの方から聞こえてきている。そこでやっと頭がスッキリしてきた。

そうか、俺は並行世界に来たのか。一日たって、再び実感するような感覚が脳と心を刺激する。

俺は、僅かに残る靄を振り払うかのように頭を振り、完全に覚醒させた。

「早く起きなさい。私を待たせるなんて百年早いわよ！」

——この声は、遠坂か……。

俺はこれ以上ドアに負担をかけないように、迅速にドアへと近寄り、横に付けられたモニターへ指を這わせる。

瞬間、ピツという電子音が鳴り静かにドアが開いた。

「やっと起きたわね。ほらいつまでもボケっとしてないで早く準備しなさい」

「えっと……遠坂さん、どうしたんだこんな朝早くから？朝は弱いはずだろ？」

窓から空を見れば、夜を明けてからほとんど時間がたってない。まだ人は眠っているか、起きていても各自の時間で行動しているはずだろう。

まして、昨日の寝起きの遠坂から鑑みるに、朝は弱いと思っただが、目の前の遠坂からはその気配が感じられない。

「ええ、今日は自分自身、信じられないくらいスッキリ目が覚めたわ。・・・てつ、そんなことアンタには関係ないでしょ！ていうかなんで知ってるのよ。私はねアンタの案内を一成に頼まれたのよ」
「案内？ああそういうことか、だったら言ってくればこっちから行ったのに。わざわざありがとうな遠坂、さん」

「三階から上は、女子部屋よ、男子禁制のね。許可なく一步でも踏みしめた者は例外なく血祭りにしてきたわ。言っておくけど、アンタが昨日入っていたのは例外よ。ちょうど空いている部屋があそこしかなかっただけ。次はないと思いなさい」

忠告と共に睨んでくる。

俺は背筋を寒いものが走ったのを感じ、無意識に首を縦へと振っていた。

「・・・あと、遠坂でいいわ」

「え、・・・遠坂？」

「呼び方よ。なんかアンタ呼びにくそうだし。それにアンタのその顔で遠坂さんなんて呼ばれると鳥肌立つのよ」

そう言って、遠坂は右手で左腕を摩った。

その言いようは酷いと思ったが、これまでに培われたこの手の勘がツツコムなど、言っているので素直にそれに従う。

「それよりも早く準備しなさい、午後までには終わらせたいんだから。それにもう一人待たせているしね」

「あ、ああ、分かった。少し待っててくれ」

踵を返し、準備を始めようとするが、すぐに遠坂へと振り向いた。
「ああそつだ。おはよう、遠坂」

「——ッ。ええ、おはよう・・・衛宮君」

遠坂は、若干顔を横へと逸らし返事を返してくれた。俺はそれに首をかしげたが、これ以上待たせちゃ悪いと準備に取り掛かった。

準備を整え、といっても顔を洗ったり、歯を磨いたり、貸してもらった服を着替え、遠坂と共に廊下を歩いていく。この奥まで日光が届いてこないのか、少し薄暗い印象を受けた。

廊下はまだ人気がなく、部屋の中で音が聞こえるのがいくつかあった。

廊下を抜け、エレベーターで一階へと降り、少し歩いて行くと、外へと続く自動扉の前で立っている人が目に入った。

遠坂はその人へと声をかける。

「ごめんアルトリア、待たせたわね」

「いえ、私も今来たところです。・・・それよりもリン、彼が本当にそうなのですか？」

セイバーが鋭い視線を向けてくる。

「ええそうよ。私もまだ半信半疑だけど、イリヤが言うんだしね。彼が並行世界から来た衛宮士郎よ」

「そうですか」

セイバーは遠坂から離れ、俺の前へと移動してきた。ちょうど向き合う形だ。

「はじめまして、私の名前はアルトリア・ペンドラゴンと言います」

「えっと、聞いたと思うけど、俺は衛宮士郎。並行世界から来た、衛宮士郎だ」

「ええ、・・・私はアーチャーの昔の姿は知りませんが、どこなく似ている節もある。おそらく並行世界というのは本当なのでしょう。それをふまえ、一つお聞きしたのですが？」

「ああ、俺が答えられることなら」

「あの廃墟でのことです。アナタは、本来部隊間でしか使われない

セイバーというコードネームを知っていました。私はアナタの世界で知り合いだったのですか？」

「ああ、それは私も気になるわね。私のことも妙に馴れ馴れしいし」
「それは——！」

考えてみれば当然の質問だ。知らない人間が知るはずのない情報を持つていれば勘ぐるのは必然だろう。

しかし、どうやって説明したのか。セイバーとは恋人、だったというわけではない。お互いの気持ちを確認しただけだ。それを目の前のセイバーに、俺はセイバーが好きだったと説明するのはどうなんだろう？ 何か誤解と受けそう、というか、目の前のセイバーに好きだと言ったらそれは告白ではないか・・・、テッ！俺は何を考えてるんだ？！

自分の纏まらない思考に、頭をガリガリとかき苦悩する。

セイバーは目の前の男の挙動不審な態度に眉を顰めている。

「あの、答えるにくいことであれば、無理にとはいいませんが・・・」

「あ、いやそうじゃないんだ。セイバーと遠坂とは、仲間だったんだ。凄く大切な・・・」

凄く大切な・・・。

「そうでしたか。では、そちらの私も心配していることでしょう。アナタが一刻も早く、元の世界へと帰れるよう私も手伝うことにしましょう」

「そうね、まあ私も手伝ってあげてもいいけど」

「ああ、ありがとうセイバー、遠坂」

「私のことはアルトリアと読んでください。親しい者はそう呼んでいます。それに、その名は戦闘時、あるいわ作戦行動中にのみ使われるので」

なるほど。聖杯戦争じゃ真名を隠すためにセイバーというクラス名を使ってたけど、こっちじゃ逆にクラス名を隠しているのか。それならば確かに昨日ランサーが、俺がクラス名を呼んだ時に真っ先に警戒し、殺しに来たのにも納得できる。いきなりサーヴァントに向けて、真名を言い当てたようなものだからな。

「分かった。じゃあ俺のことも名前で呼んでくれ」

「・・・では、シロウと。アーチャーとの区別にもなりますし」

「しつつかし、私が言うのもなんだけど、そっちの世界の私も災難よね、アンタの御守をさせられてるなんて」

その言葉に軽くへこむ。迷惑を散々かけてきた身としては、それに反論は許されない。甘んじて受けるしかないのである。

セイバーは、俺の反応に苦笑を浮かべながら、リンへと改めて向き合った。

「では、リン。時間を取らせましたがそろそろ行きましようか」

遠坂はそれに頷くと、俺達は自動扉をくぐった。

008：セイバー（後書き）

どうだったでしょうか？

前回は遠坂との戦闘と書いていましたが・・・

今回先にやっておきたかったのは、士郎の呼び方を早く決めてしまいたかった。

いつまでもアンタとかアナタとかではちょっと・・・、と思いました。

だからと言って、この世界に衛宮士郎がいる以上、普通に呼ばせ辛かったのだ。

次は場所の説明です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3052o/>

Fate/parallel night

2010年12月12日14時47分発行